

成長した私 ～6日間の活動を通して～

社会福祉学部社会福祉学科 2年 飯野 里紗

活動先：NPO 法人 チャレンジド

クラス：岡 多枝子 先生

1. はじめに

私は1年生の時に授業の一環としてサービ斯拉ーニングフォーラムに参加したことがきっかけで初めて「サービ斯拉ーニング」という言葉を聞き、その活動に興味を持った。私も先輩方のようにいきいきと活動をしたいという憧れから挑戦したサービ斯拉ーニングは、実際にやってみると予想以上に大変な活動であったが、私自身を成長させる大きなきっかけとなった。その活動について紹介するとともに、更に成長することができるように活動を振り返っていく。

2. NPO 法人 チャレンジドとは

NPO 法人 チャレンジドは日本福祉大学から徒歩 15 分ほどの場所にある。

2001 年に日本福祉大学に通う障害学生の学外生活支援から活動が始まった。「障害があっても必要なサポートを受け、学生らしい生活を送れるよう、地域での支援体制を作る」をモットーに活動をしていた。現在では、「障害当事者と共に暮らし、共に学ぶ」をモットーに、学生だけでなく美浜町周辺地域で暮らす障害者の支援を行っている。



3. 活動内容

活動を行う前に私たちのグループは、2つの活動目標を立てた。1つ目の目標は「日中一時支援ちゃれっこくらぶに参加し、子どもたちと関わる」である。私たちが活動中に関わった多くの子どもたちは「自閉症」という障害を持っている子どもたちである。自閉症は以下の3つの特徴を3歳以前から持っている人のことを言う。1つ目は「対人関係が薄くて社会性の発達が悪い」である。これは、人と目が合わない、合わせにくい、視線を避ける、集団行動が苦手などという特徴である。しかし、個人差はあり、安心できる人とであれば関わることができたり、逆によく知らない人にもやや一方的に関わってしまう子どももいる。2つ目は「コミュニケーションの障害」である。自閉症の子どもたちは言語性のコミュニケーションが苦手な傾向にあり、絵や写真など見てわかるものを使って、情報を伝えると理解しやすい。3つ目は「興味・活動の狭さ」である。行動面では、反復的な行動（常同行動）が見られ行動がパターン化する傾向にある。また、こだわりには、順番や道順、物の置き場所などにこだわることがよくある。¹

¹石井 葉(2004 年)『「自閉的」といわれる子どもたち～その理解と指導の実際～』鈴

私はこの活動をするまでほとんど障害児と関わったことがなかったため、文章では「自閉症ってこういう障害なんだ」ということを理解していても、初めて子どもたちと会った時はどう子どもたちと関われば良いのかわからなかった。そのような時に職員さんにそれぞれの子どもたちのことを教えていただき、徐々に子どもたちに積極的に関わっていくことができるようになった。

そして、もう1つの活動目標は「学生企画の計画と運営」である。この企画はメンバーの「夏らしいことをいっぱいしたい」という思いから始まった企画である。夏祭りウォークラリーや花火などをして楽しんだ。企画を作る上で1番苦労したところは



「参加する子どもたちの障害に対してどんな配慮をしなければいけないのか」ということや「もし何かあったときの対応はどうするのか」ということを常に念頭に置きながら計画を立てることであり、私たちが想像していた以上に大変なことだと実感した。しかし、企画当日は、子どもたちの笑顔をみることができ、楽しい企画にすることができたのではないかと思います。

4. おわりに

私はこのサービ斯拉ーニングを通して、何事にも準備が大切であることを実感した。ただ、計画を立て、物品を準備するだけではいけない。シュミレーションを行ったり、その計画について私たち自身が理解していなければプログラムは上手く進まないのである。事前準備の大切さということはサービ斯拉ーニングだけに限らず、様々な場面で応用されるものだと思う。今回の活動ではできなかった細かい事前準備をすることを他の場面でしっかりと行いたい。

そして、この活動で「地域のなかにおける NPO」を身をもって感じる事ができた。そのなかでチャレンジがある美浜町には、子どもたちが思いっきり遊ぶことのできる場所が少ないということを感じた。「美浜町にはこのような活動をしている NPO 法人があることがわかっているなら、チャレンジから歩いて行ける距離に1か所くらい大きな公園を作ってくれてもよいのではないか」と思っていた。地域によって格差があることが悪いわけではないと思うが、あった方がよりチャレンジにとってはプラスの要素になるのではないかと思います。また、地域に公園があれば、より一層 NPO と地域住民との交流ができるのではないかと思います。